

魯迅のヒュウマニズム

かわかみ・ひさとし

晩年の魯迅を共産主義者と見做す見解は今日の中國では普遍的であり例外はない、しかしわが國ではそれでもまだこの例外に屬するものがかなりいるようである。このように中國と日本とでは魯迅の見方についても一致していない点があることは、兩國のおかれてある歴史的環境や社会制度それから階級的思想的立場の相違を反映しているのかもしれない。魯迅がいつた當時とは逆な意味で中日兩國の意志は當分の間通じることがはむずかしいのだろう。

中國の最も傑出した魯迅研究家馮雪峯の論文はひじょうに貴重なものであるが、それでも私に合點のゆかないところがあるというのもこの邊の事情からきているようである。一九五二年北京で出版された「回憶魯迅」はこれまで秘められていた未知の事柄が明るみに出されて魯迅研究上の貴重な文献となつている。馮雪峯は魯迅の門弟であり筋金入りのコミニストであり一九二八年十二月から一九三六年十月までの間一時的に上海をはなれたことはあつても、魯迅が晩年の十年間を暮らした上海について魯迅の許に通いとおした人である。彼が一番よく魯迅を知っている一人であることは彼の魯迅論を精彩あらしめている一つの理由である。馮雪峯も魯迅を共産主義と見做している筆頭である

ことはいうまでもない。コミニストの立場からみれば魯迅は完全な、恐らくは毛澤東とともに中國における完全なコミニストであろう、魯迅の思想と實踐およびその統一またその作風は毛澤東その他少數を除き他のどの黨員よりもコミニスト的であるだろう。私はさきの論文で魯迅を無産階級の觀點にたつた革命的ヒュウマニストとよんでおいた。魯迅にはコミニストと規定しきれないものがあり基本的にはマルクス・レーニン主義者である魯迅を認めながら彼のヒュウマニズムにコミニストのそれを超えるものがあるように思われてならなかつたのである。いま私は魯迅のヒュウマニズムをさらに一步探つてみたいと思う。

まずはじめに、魯迅が人民をいかにみていたか、という魯迅の人民觀を知ることが必要である。なぜなら人民の力の認識なしには彼の思想の轉換も戰略戰術も考えられないからであり、またそういう諸條件なしに魯迅ヒュウマニズムの高次の發展は不可能だつたからである。がその前に從來の支配階級の人民觀はどんなものであつたらうか。

奴隸主の人民觀——歷史上、奴隸社会において上層階級は奴隸を所有し多ければ何千、少くとも何百何十の奴隸を所有し、奴隸は肉體上のみならず人格上も主人に所屬し、彼らは自由に奴隸を賣買できるし生殺與奪の權を握つていた。奴隸の主人の基本目的はいかにして奴隸の身から多くの血と汗を搾り出し自己の富を増加し享樂を満足せしめるかにあつた。奴隸の主人が追求するものはいかにして自己の奴隸を増やすか、またいかにして奴隸を牝牛の如く従順ならしめるかにあつた。しかも彼らにとつてそれは極めて合理的ですらあつたのである。

封建地主の人民觀——彼らは農民の血と汗を搾取することによつて自己を肥やすことを唯一の目的としている。これらの地主は廣大な土地を所有し、土地を持たないかまたは極く少ししか持つていない農民から大部分の收穫を収奪し、農民をして牛馬にも劣る生活を強いている。地主からみれば農民は生れつき「賤しき者」で運命により自己のため牛馬として働くべきものであり、農民が餓死凍死しようとも自己の寄生虫的生活に係りなしとしてひたすら収奪

をこゝしてゐるのである。彼らの残酷な搾取と壓迫は農民の反抗をもたらさずにはおかないが、彼らは殘虐にそれを鎮壓し他方では仁義道德中庸の道を唱え農民の反抗精神を癒酔せしめてきたのである。

帝國主義の人民觀——帝國主義資本家の目的は國內では勞働者階級を奴隸化し搾取し對外的には弱小民族を收奪し壓迫するものである。彼らは老大な資本機械をもつて工場を開き勞働者に低賃銀を強い勞働時間を強化し機械を改良して勞働者をさらに收奪し、弱小民族に對しては原料を買収し商品を輸出し各種の借款を與え租界をひらきさらに戰爭の方法をもつて武力的に殖民地或いは半殖民地と化せしめ、弱小民族を劣等視し奴隸化しその犠牲の上に自己の繁榮を築いてゐる。

中國の官僚買辦の人民觀——これは外國帝國主義の下僕として奴隸の取締官の役割を果してゐる、すなわちその余惠を蒙りながら土豪劣紳・軍閥と結びつき、主人の前では阿諛追従し媚態のかぎりをつくすが人民に對しては嬌慢橫暴獨裁的で「高等華人」と自稱してゐる。彼らは外國の主人の援助の下に、中國人民の血と汗を搾り人民が反抗に起ち上ると主人の武力援助を仰いで人民を残酷に屠殺し鎮壓する。

以上が中國における支配階級の人民に對する態度であり人民觀である、その表現形式はそれぞれ異なるが實質は結局においてたゞ一つである。彼らに共通するものは大多數の人民を壓迫し搾取し奴隸化する權利があると心得、反抗するものには嚴重な處分刑罰をあたえうるものと確心してゐることにある。彼らは高等あるいは優劣な人物・階級・民族と自負してゐる。彼らが最もおそれてゐるものは、廣汎な人民大衆が覺醒して起ち上り組織されて反抗することである。

魯迅の人民觀は以上數種の腐朽し没落してゆく極く少數の支配階級のそれとは根本的に對立するものである。魯迅によれば、人民は決して賤しいものではなく、また奴隸の主人・封建地主・官僚買辦・資本家の奴隸として牛馬に

も劣る生涯を運命づけられているものではない。人民が踏み蹂られ無智蒙昧のうちに死んでゆかねばならないのは、何も神祕な運命ではない、支配階級が社会の生産手段の全部あるいは大部分を占有し武力をもつて人民を支配し壓迫してきたからである、これが歴史の真相なのだ、支配階級の御用学者御用歴史家のみがこれらの事實を隠蔽し歪曲し偽造してきたのである。魯迅はこれらのヴェールをひき裂いて中國の歴史社会の眞面目をさらけだした。

人民は支配階級およびその幫間どものいうが如く「愚民」でもなければ團結心がないのでもなく文化や政治に關心がないのでもない。それらは愚民政策の結果にしかすぎない、人民は長期にわたつて經濟上殘酷な搾取を受け饑・凍死・拷問・殺戮にさらされていた、この情況のもとに人民が文化や政治に無關心であるのみかそれを憎惡してさへいたことはもちろんのことである。しかしそれだからとて、人民が智識を求めず政治を遠ざけ團結の力なく管理能力なしとすることはできない。事實、中國人民は長期にわたる被壓迫被搾取の苦痛の生活から經濟政治上改革の必要を痛切深刻に體驗してきたのであり、しかも勇敢に反抗し闘争してきたのである。魯迅晩年の雜文はこの點を繰り返し述べて中國人民の偉大な反抗闘争精神を讃え、これをもつて人民の力と自信を鼓舞激勵している。それと同時に人民の側における落後性・散漫性・保守性・機械主義・妥協性等々をも指示し、闘争のうちに改めるべきことを訴えているのである。人民の缺點や弱點は支配階級の意識的愚民政策のもたらしたものであることを、われわれは魯迅後期の雜文とくに南腔北調集以後のものにいたるところに見出すことができる。

中國的愚民——沒有學問的下等人，向來就怕人注意他。如果無端の間他多少年紀，什麼意見，兄弟幾個，家景如何，他總是支吾一通之後，躲了開去。有學識的大人物，很不高興他們這樣的脾氣。然而這脾氣總不容易改，因為他們也實在從經驗而來的。（註一）

不負責任，不能照辦的教訓多，則相信的人少；利己損人的教訓多，則相信的人更其少。「不相信」就是愚

民」的遠害的塹壕，也是使他們成爲散沙的毒素。（註二）

在中國的王道，看去雖然好像是和霸道對立的東西，其實是兄弟，這之前和之後，一定要有霸道跑來的。人民之所謳歌，就爲了希望霸道之減輕，或者不更加重的緣故。（註三）

說起大衆來，界限寬泛得很，其中包括各式各樣的人，但即使「目不識丁」的文盲，由我看來，其實也並不比讀書人所推想的那麼愚蠢。他們是要智識，要新的智識，要學習，能攝取的。當然，如果滿口新語法，新名辭，他們是什麼也不懂；但逐漸的檢必要的灌輸進去，他們卻會接受；那消化的力量，也許還賽過成見更多的讀書人。（註四）

「若要官，殺人放火受招安；若要富，跟着行在賣酒醋。」這是當時百姓提取了朝政的精華的結語。（註五）自以爲居于安全地帶的報館的報紙，則稱這些逃命者爲「庸人」或「愚民」。我卻以爲他們也許聰明的，至少，是已經憑着經驗，知道了煌煌的官樣文章之不可信。他們還有些記性。（註六）

誠然老百姓雖然不讀書，不明史法，不解在瑜中求瑕，屎裏覓道。但能從大概上看，明黑白，辨是非，往往有決非清高通達的士大夫所可幾及之處的。……（註七）

誰說中國的老百姓是愚庸的呢，被愚弄誑騙壓迫到現在，還明白如此。（註八）

これらの數例は、魯迅が人民を天性の愚民と見做してもいなければ、愚民と呼ばれる人民が決して愚かでないことを證明しているものである。人民は教育の機会さえ與えられれば偏見の多い讀書人よりも賢くさえあるのだ。魯迅が人民の智慧を發見したのは、中國の舊社会をよく觀察し研究し、それにつゞく支配者と人民の探求に基づくのであるが、その根柢をなすものは人民に對する深い愛情である。人民を蔑視し奴隸化している支配階級およびその代辯者は人民の智慧を發見することはできないし、むしろかえつて發見することを喜ばないのだ。だから人民が危害を避け

るための安全地帯であり塹壕である「疑い深い」ことを笑うべき缺點と見做すのである。魯迅は自己の運命を中國人民の運命に結びつけ人民とともに苦闘し解放の道を求めた。彼は人民の苦痛・患難・反抗・戦闘・敗北および流された血潮を自己のものとして感じていた、彼と人民は完全に一體であるとともに平等な關係にたつていた、彼は人民を見下すこともしなければまた指導者ぶることもしなかつた。當時の中國のように後れた社会では先覺的知識分子の社会革命における指導的役割は大きかつたが彼は知識分子の限界を知つていた。

由歴史所指示，凡有改革，最初，總是覺悟的知識者の任務。但這些知識者，卻必須有研究，能思索，有決斷，而且有毅力。他也用權，卻不是騙人，他利導，卻並非迎合。他不看輕自己，以為是大家的戲子，也不看輕別人，當做自己的嘍囉，他只是大衆中的一個人，我想這纔可以做大衆的事業。（註九）

この文章は指導的知識分子の原則性をとりあげている、人民大衆の事業をなす指導的知識分子は、頭腦をもとともによく研究し、決斷力と逞ましい實踐力をもたねばならないが、それだけでは大衆の事業をなしとげることはできない、彼は何よりも大衆のなかの一人でなければならぬのであり、大衆と緊密な連繫をもつていなければならぬのだ。それはどこか高いところから大衆に號令をかけて指導するといふものではない、指導者は大衆と魚水の關係にあるべきで、大衆から離脱してはならぬと嚴にいましめているのである。と同時に、他方では大衆への追隨的傾向すなわち大衆の將來という遠大な見透しを忘れて大衆の目先の歡心を買ひ彼らの口に合うように迎合してゆくことに反對し、確固とした原則性をうちたてゝいることである。

現實改革の革命的ヒュウマニストであつた魯迅は、改革の必要條件の一つである指導的知識分子についてさらに述べている。

梁實秋先生們雖然很討厭多數，但多數的力量是偉大，要緊的，有志于改革者倘不深知民衆的心，設法利導，

改進，則無論怎樣的高文宏議，浪漫古典，都和他們無干，僅止于幾個人在書房中互相歎賞，得些自己滿足。

(註一〇)

倘不深入民衆的大層中，于他們的風俗習慣，加以研究，解剖，分別好壞，立存廢的標準，而于存于廢，都慎選施行的方法，則無論怎樣的改革，都將爲習慣的岩石所壓碎，或者只在表面上浮游一些時。(註一一)

こういう立場や態度というものは人民への深い愛情なしに生れ出るものではない、それゆえ魯迅は人民の智慧を發見し力を確信したばかりではなく、同時に人民に学び斷えず自己を改造し人民のために仕えていつたのである。

初期においてさえ魯迅の人民に学ぶという眞摯な態度は溢れており、上層階級よりも下層階級のうちに人間性の高貴な性質をみていたのである。

我這時突然感到一種異樣的感覺，覺得他滿身灰塵的後影，剎時高大了，而且愈走愈大，須仰視纔見。而且對於我，漸漸的又幾乎變成一種威壓，甚而至於要擰出皮袍下面藏着的「小」來。

這事到了現在，還是時時記起。我因此也時時熬了苦痛，努力的要想到我自己。幾年來的文治武力，在我早加幼小時候所說過的「子曰詩云」一般，背不上半句了。獨有這一件小事，卻總是浮在我眼前，有時反更分明，教我慚愧，催我自新，並且增長我的勇氣和希望。(註一二)

こうして魯迅は人民のすぐれた資質・品性・力量を宣揚し勇氣づけたが、他方ではまた絶えず支配者により馴致された缺點弱點をも示してその根拠をも衝いてゐる。

然而也有經過許多人經驗之後，倒給了後人壞影響的，如俗語說「各人自掃門前雪，莫管他家瓦上霜」的便是其一。救急扶傷，一不小心，向來就很容易被人所誣陷，而還有一種壞經驗的結果的歌訣，是「衙門八字開，有理無錢莫進來」，于是人們就只要事不干己，還是遠遠的站開乾淨。我想，人們在社會裏，當初是並不這樣彼此漠不

相關的，但因豺狼當道，事實上因此出過許多犧牲，後來就自然的都走到這條路上去了。所以，在中國，尤其是在都市裏，倘因使路上有暴病倒地，或翻車摔傷的人，路人圍觀或甚至高興的人儘有，肯伸手扶助一下的人卻是極少的。這便是犧牲所換來的壞處。（註一三）

かようにして、巧妙な支配政策のもとに人民はひたすら納税し分に安んずる以外國事はもとより他人のことには一切無關心であるべく馴らされてきた。人民の團結と反抗を怖れる支配階級は、自己の政策の結果の責任を人民に押しつけることにより自己の意圖を陰蔽し、人民を愚弄するものである。

近來的読書人，常常歎中國人好像一盤散沙，無法可想，將倒楣的責任，歸之于大家。其實這是冤枉了大部分中國人的，小民雖然不學，見事也許不明，但知道關於本身利害時，何嘗不會團結。先前有跪香，民變，造反；現在也還有請願之類。他們的像沙，是被統治者「治」成功的，用文言來說，就是「治績」。（註一四）

所謂「洋氣」之中，有不少是優點，也是中國人性質中所本有的，但因了歷朝壓抑，已經萎縮了下去，現在就連自己也莫名其妙，統統送給洋人了。（註一五）

人民在欺騙和壓制之下，失了力量，啞了聲音，至多不過有幾句民謠。「天下有道，則庶人不議」。就是秦始皇，隨煬帝，他會自稱無道麼？百姓就只好永遠箝口結舌，相率被殺，被奴。這情形一直繼續下來，誰也忘記了開口，但也許不能開口。……「莫談國事」，是我們做小民的本分。（註一六）

こゝにおいて魯迅は中國人民の散漫性、一盤散沙といわれている俗説の誤りであることを明らかにする。支配階級の巧妙な支配方策の下に一應は沙の如く見える人民も、事自身の利害關係に密接な場合團結しなかつたことはない。彼はこれを歴史上幾多の事實をもつて證明する、そしてさらに輝かしいのは沙は小民・愚民ではなく大小の支配者であるという洞察である。

人們又常常說：「陞官發財」。其實這兩件事是不並列的，其所以要陞官，只因為要發財，陞官不過是一種發財的門徑。所以官僚雖然依靠朝廷，卻並不忠於朝廷，吏役雖然依靠衙署，卻並不愛護衙署，頭領下一個清廉的命令，小嘍囉是決不聽的，對付的方法有「朦蔽」。他們都是自私自利的沙，可以肥己時就肥己，而且每一類都是皇帝，可以稱尊處就稱尊。有些人譯俄皇爲「沙皇」，移贈此輩，倒是極確切的尊號。（註一七）

かくて人民の弱點・缺點といわれるものはすべて支配ももつているのである、いやこれは並列的にもつていとうものではない。さきに阿Q主義が人民のそれであるとも、支配者のそれであり、かつまたそのもとをたゞせば支配者より出でて支配者が人民支配の麻醉薬として用いたものであつたように、人民の懷疑といふ散漫性といふそれは支配階級にその根源をもち、支配階級より人民へと持ち込まれたものである。だから人民が仲々人を信じないのを悪い癖と見做すところの学識ある大人物といえども、孔子を尊崇していながら同時に佛道にも歸依しているのである。

然而有這脾氣的也不但是「愚民」，雖是說教的士大夫，相信自己和别人，現在也未必有多少。例如既尊孔子，又拜活佛者，也就是恰如將他的錢試買各種股票，分存許多銀行一樣，其實是那一面都不相信的。（註一八）

事實はかくの如きものである、とすればたゞ一つの道は人民をして彼らの力を自覺せしめることにある。人民は教育の機会を得ず無知と迷信に沈み分に安んじ運命に甘んずべく教えられているが、中國人民は運命の移轉し得べきことを知つてゐる。魯迅はここにもまた人民の智慧を發見して樂觀に値するところがあるのである。

運命並不是中國人的事前的指導，乃是事後的一種不費心思的解釋。……

人而沒有「堅信」狐狐疑疑，也許並不是好事情，因爲這也就是所謂「無特操」。但我以爲信運命的中國人而又

相信運命可以轉移，卻是值得樂觀的。（註一九）

人民の力を探索しつゞけた魯迅は、同時に支配者の力をも探索しつゞけた魯迅である。魯迅は人民の力を發見したることによつて人民の敵の力を輕視したり見落したりは決してしなかつた。過去の中國革命の經驗および教訓から彼は多くのものを學んでいた。外國資本主義が中國を侵略し、中國の國土を半殖民地と化し中國人民を奴隸の悲運に陥し入れてからでもほゞ百年の歲月がたつていた。この百年の間に中國人民の鬭争は、英國の侵略に對するアヘン戰爭に始つて、太平天國の農民革命・日清戰爭・戊戌の維新・義和團・辛亥革命・五四運動と人民の鬭争はつゞけられた。しかしそれらは完全に勝利したるうか。孫文は革命未だ成功せずといつて死んだ、その原因はどこにあるのか。人民の力があまりに弱く人民の敵の力が壓倒的に強大であるからではないか。現實主義の鬭争者としての魯迅がその戰略戰術——ねばり強い鬭争・敵を寛恕しない非妥協性・現實正視・廣汎な統一戰線の結成・反中庸——を編み出さねばならない必然性はこゝにあるのであり、彼が武力抵抗思想を懐くにいたつた根源もこゝにある。

二

魯迅が暴力の肯定者であることはすでにあきらかである。しかし彼はヒュウマニストであることが彼の生涯をつらぬいてそうであつたように暴力の肯定者ではなかつた。これもまたあきらかである。魯迅のような人はいずれの時代いずれの社會においてもヒュウマニストでありつゞけるだろう、しかし暴力論者でありつゞけることはできない、彼にとつて暴力が思想や精神上に占めるものは本然的なものではない。しかし魯迅にとつて人間尊重・生命尊重といふことは絶對的とさえいつていい、私はこの問題を究めたいと思うが、まず魯迅の暴力論發生から入るこ

とにする。

魯迅が生きていた時代は十九世紀の八十年代から二十世紀の三十年代であり、世界の資本主義が中國の封建勢力を支配下におき彼らを利用して中國の殖民地化半殖民地化をおし進めていた時代であると同時に、中國人民の自然發生的および覺醒的意識的反抗の時代でもあつた。魯迅の生れる四十年前にアヘン戦争がおこりそのまた十年後には太平天國の農民戦争が起つて十五年もつづいた。魯迅はすでに少年時代から資本主義の侵略と封建主義の壓制のもと、中國農村が日々に衰微没落し苦難におち込んでゆくのをみてきた。この時代において、農民と親しく接近していた彼は、「終生壓迫をうけ、苦痛にみちている」ことにひどく心を動かされていたのである。その頃から彼の心底に民族と下層人民の運命というものが強く心にしるされていたことは疑いのないところである。その後、水師学堂や路礦学堂で学んでいた頃の彼は、當時の風潮であつた改良主義的社會改造の思想をもつようになった。これはかなりの間魯迅の思想に影響していた、彼が改良主義的コースを清算したのは日本留学中のことである、魯迅にすこしでも暴力肯定思想が生じたと思われするのはこの時代からではないかと思う。というのは、當時の日本（主として東京）は中國革命の中心ないし根據地みたいになつており、その宣傳と組織の中心は東京にあつた。孫文を中心とする當時のブルジョア民主主義革命家は一九〇四年に同盟会を組織し、機關紙「民報」を出して康有爲や梁啓超等の改良主義思想と戦つていた。彼はこの運動の浪のなかにあつたからである。彼が清朝打倒の革命組織である光復会の一員であつたことは、現在ではすでに立證せられてゐることであり（林辰著魯迅事蹟考の魯迅會入光復会之考證をみよ）、これより以前増田涉氏も魯迅と光復会との關係については、「章太炎との關係から光復会に關係していたことは争へない事實」とされている。（註二〇）。そしてさらに「だが或は入黨してゐたのではないかと考へられることは、自分は清末に革命運動をやつてゐたとき、或る要人の暗殺を上級のものから命じられた、だが出かけるときに、自分はたぶん

捕まるか殺されるかするだろう、もし自分が亡くなつたら、あとに母親が残つてゐるが、母親をどうしてくれるかハツキりきいておきたい、といふことを申出たら、そんなアトに心が残るやうではダメだからお前はやめるといふことになつた、……この刺客になる命令をうけたといふことから私はやはり彼は黨に入つてゐたのではないかと思ふ。」とある（註二一）これは當時の魯迅が革命のためにはテロ行爲をも是認していたことを證明するものであろう。魯迅前期の世界觀が明白にあらわれている論文「墳」によると、世界を鬭争の巷と見做す革命的戰闘的な世界觀がみえる、これは彼がはやくも影響をうけた生物学的な進化論的世界觀で、鬭争を永久的絶對的なものとなし平和を一時的相對的なものと見做すものである。（註二二）こういう魯迅が一九〇〇年の義和團事件に八ヶ國連合軍の中國人民に對する大虐殺に憤激し、「我以我血薦軒轅」という詩を書き中國民族解放に献身すべく誓い、反抗精神をかきたたられ、彼の武力抗争思想はしだいに形成されていつた。辛亥革命に際しては、紹興師範学校の校長をしていたが、自ら生徒を組織して「武装演説隊」を結成して宣傳活動に従事したそうである。この時代の魯迅暴力思想は毛澤東のいう認識發展の第一段階に屬するものであり、國內および國外の壓迫者による暴虐に對する自然發生的で反射的ともいふべき性質のもので、感性的認識の段階にあつたといふべきである。その認識は一面的であり事物の本質を正確に反映しているとはいえなかつた。

その後、魯迅は辛亥革命の失敗の經驗と教訓に学び、暴虐な支配者を倒しても國民性が改められないかぎり表面の看板はいかに變つても中味は同じであることを悟つた。こうして彼は國民性の改造という思想革命のコースを辿るようになつたのである。この時期はつとに日本留学中仙臺醫專で日露戦争の幻燈映畫による有名な話の頃からはじまつていたといえるが、事實上は辛亥革命以後に屬するものと思われる。それは前期の魯迅思想が集中的に表現されている「墳」の一九一八年より一九二五年までに書いたものに最もよくあらわれている。この時代は、魯迅にとつて重

大な轉換時代であつた一九二七年を準備するものとしての一轉換時代を形成するものである。すなわち、五・四およびその後の反動的逆コース時代を背景として、彼の思想革命が推しすすめられゆくときであると同時に、彼の戰鬥方式・戰略戰術が基本的に確立され、マルクス・レーニン主義への飛躍の物質的準備がとられた時代である。そして彼の戰鬥方式は思想革命を戦いながら、やがてはその思想革命方式をも否定して暴力による社会革命思想へと轉化してゆく過程でもある。魯迅にこの轉機をあてたものは何か。何が魯迅の轉化を可能ならしめたか。それは彼が終生搜しもとめた中國革命の道探求の結果である。すなわち彼は辛亥革命後かすかすの經驗に学び中國の歴史社会の研究およびどういふ社会勢力が革命の源動力となるかを探求した結果である。こうして彼は中国社会の運動法則を發見し、また支配階級の壓倒的強大さを認識したのである。この認識のもとに戰鬥的現實主義者の彼が基本的に確立した戰術戰術とは何か。まず第一に現實正視の科学的態度の確立のもとにねばり強い戰鬥、敵味方の峻嚴な區別、敵に對しては死すともゆるさぬという憎惡と味方への深甚な愛情、水に落ちた犬を打つという原則をたてることにより、仁義・道德・寬恕・惻隱・といった支配階級の人民壓迫の精神的武器を解除することである。支配階級は強大な武力をもつているのみならず、長期の支配經驗に富んでおり陰險狡猾である。彼らを一朝にしてくつがえすことは困難であり艱苦にみちた鬭争の過程を経てはじめて達せられるものである。まして支配階級は革命には斷じて讓歩もしなければ妥協もしないし、殘酷な暴力をふるつて血の鎮壓を試みるのである。だから魯迅はこの現實を直視し、敵の何者であるかをしかと見届け、非妥協のねばり強い戰鬥をなし、冒險を避け敵よりも強大な力を蓄積し、武力による鬭争をなさねばならないのである。この段階の魯迅は一九二五・六年がそれに當る、が一九二三年頃からその傾向はみえてきている。五・四の後二三年は、舊社会の昏迷と暴力を除き新しい合理的な社会を熱望していながら、新しい社会の荷い手である人民の潜在的革命性を認識していなかつたのはもちろん、舊社会の改造すら覺醒している一部の智識

人から始めて思想啓蒙による社会改造という立場しかとれなかつたのである。この點は一九一八年の「我之節烈觀」、一九一九年の「我們現在怎樣做父親」等をみればわかる。一九二五年にいたつて、魯迅の暴力思想は、もはや思想改造のコースを否定するものとしてあらわれくる。

可惜中國太難改了，即使搬動一張桌子，改装一個火爐，幾乎也要血；而且即使有了血，也未必一定能搬動，能改装。不是很大的鞭子打在背上，中國自己是不肯動彈的。我想這鞭子總要來。好壞是別一問題，然而總要打到的。但是從那裏來，怎麼地來，我也是不能確切地知道。（註二三）

これは前期の魯迅思想の矛盾を表白しているものである、一方では人民の革命性ではなく智識階級の思想啓蒙に依據しながら、他方では血の犠牲なしにはごく僅かな改革すらもなされないと中国の現實に對する認識、また社会改革における血の源動力は必ずあるという見透し、これらの洞察と豫見をもちながらなお彷徨していたのは人民大衆への評價の不足からである。

さらに一九二五年にいたると、魯迅の暴力による抵抗思想はますます鮮明の度をましてくる。

不知道我的性質特別壞，還是脫不出往昔的環境的影響之故，我總覺得復讐是不足爲奇的，雖然也並不想誣無抵抗主義者爲無人格。（註二四）

これは、かつての自然發生的暴力革命思想から思想啓蒙革命へ、そして思想革命から暴力社会革命へ移りゆくようとしていく過程である。魯迅ははまだ即自向自的（an und für sich）な社会革命思想へは到達していないがその一歩手前にある。すなわち、彼のは一定の階級的立場にたつた社会革命ではなく、超階級的な社会革命の立場にあつたということである。だが思想革命のコースをとつていた時代でも、その暴力肯定思想は否定されていたわけではない、たゞ表面には強く出ていないだけのことである。彼が明確にしているように無抵抗主義に反對し復讐を當然のこと

となしてゐる。しかし、この矛盾は、魯迅が思想革命の方式をもつて戦つてゆくうちに獲得していつた人民および人民の敵の力の認識とそれに基づく戦闘方式によつて、思想革命コースを否定せしめずにはおかない必然性をもつていた。一九二五年十二月に書いた「論費厄潑頼應該緩行」はこの點を最もよく表明してゐるものである。

或者要疑我上文所言，会激起新舊，或什麼兩派之爭，使惡感更深，或相持更烈罷。但我敢斷言，反改革者對於改革者的毒害，向來就並未放鬆過，手段的厲害也已經無以復加了。只有改革者卻還在睡夢裏，總是喫虧，因而中國也是沒有改革，自此以後，是應該改換些態度和方法的。（註二五）

支配階級・反革命家の虚偽・卑劣・暴力は窮まりない、彼らに對する寛容は逆に革命者への殺戮として戻つてくる、しかもその手段の残酷さはいよいよつるばかりである。この事實は魯迅をして從來の態度・方法を一變して敵に對する不寛容・武力抵抗を決意せしめた主要理由である。そしてこの暴力思想をさらに發展せしめるものはマルクス主義の理論ではなく、中國人民の血の犠牲である、暴力思想にかぎらず彼の思想を推進せしめるものは常に中國人民の血の現實である。彼がもし理論からマルクス主義に入つたならばとうに五・四時代からマルクス主義者になつていたであらう。だから彼の暴力思想は一九二六年の三・一八事件によつて決定的なものとなるのだ。すなわち血潮には血潮もて、血債は同じ血債をもつて償われねばならなくなるのである。

如果中國還不至於滅亡，則已往的史實示教過我們，將來的事便要出于屠殺者的意料之外——這不是一件事的結束，是一件事的開頭。

墨寫的謊說，決掩不住血寫的事實。

血債必須用同物償還。拖欠得愈久，就要付更大的利息！（註二六）

舊社会との闘争において、暴力の必要性を認識した魯迅は、他方ではもちろん公正無私を装いまた暴力を憎み中

庸を口にするファシストの代辯者たちと徹底的に非妥協の闘争を行つた。こういう偽物の第三者の階級的立場をいたるところで暴露し、彼らが帝國主義およびその奴才の幫間にすぎないこと、そして彼らとの闘争はあくまで階級的立場にたつものであると同時にプロレタリア國際主義とむすびつくべきことをくり返している。しかもこの立場のみが唯一の活路であることを。

我中華民族雖然常常的自命爲愛「中庸」，行「中庸」的人民，其實是頗不免于過激的。譬如對於敵人罷，有時是厭服不尙，還要「除惡務盡」，殺掉不尙，還要「食肉寢皮」。但有時候，卻又謙虛到「侵略者要進來，讓他們進來。也許他們會殺了十萬中國人。也不要緊，中國人有的是，我們再有人上去」。（註二七）

中庸を愛し自ら中庸と信じている支配階級およびその奴才は、最も中庸ならざるのみならず目的のためには手段をえらばぬ人たちである。彼らは單に壓服し、殺戮するにとゞまらずその肉を喰い皮を褥にするほど激烈なのである。にもかゝらず一度他の強力な權力の前でると禮讓のかぎりをつくし、彼らに殺戮暴行の Patent をあたえ、自ら進んで走狗となりすべてを主人にさしげる。彼らは人民に中庸の徳を説き仁愛をすゝめるが、中庸ならず仁愛ならざるものに對し、彼らはかつて中庸仁愛であつた試しはなく、過激かつ殘酷だつた。人民は犬・豚・羊をもつて呼ばれたが故に、中國は最も人道的な國でもあつたのである。

中國究竟是文明最古的地方，也是素重人道的國度，對於人，是一向重視的。（註二八）

支配階級は奴隸の主人であることによつて幸福をえているが故に、奴隸の謀反は彼らの最もおそれるところとなる。こゝにおいて、謀反者には酷刑が課せられる、まさに酷刑の發明と改良進歩は彼らの唯一の事業となる。しかし、人民の反抗を抑壓すべく發明された酷刑は奴隸である人民に何をもたらすか。こゝで魯迅は酷刑とそれにつゞく人民の反抗闘争との關係を次のように述べている。

奴隸們受慣了「酷刑」的教育，他只知對人應該用酷刑。

但是，對於酷刑的効果的意見，主人和奴隸們是不一樣的。（註二九）

奴隸們受慣了豬狗的待遇，他只知道人們無異于豬狗。

用奴隸半或奴隸的幸福者，向來只怕「奴隸造反」，真是無怪的。

要防「奴隸造反」，就更加用「酷刑」，而「酷刑」卻因此更到了末路。（註三〇）

支配階級は奴隸の謀反を防ぐために酷刑に加うるに酷刑をもつてするが、末路にいたつた酷刑はもはや酷刑たることをやめる。銃殺も驚くにはあたらぬし、さらし首や屍體さらしも一時的に民衆の好奇心をそゝるにすぎない、にもかゝらず謀反はあいつぎ絶えることはない。酷刑の教育は人を無感覺たらしめ酷を酷と感ぜしめなくなる。かくて無感覺におとしいられた奴隸は、まさにそのために、殘酷を物ともせず前進するのである。

人民眞被治得好像厚皮的，沒有感覺的癩象一樣了，但正因爲成了癩皮，所以又會踏着殘酷前進，這也是虎吏和暴君所不及料，而即使料及，也還是毫無辦法的。（註三一）

酷刑の發明と改良者である支配階級の意圖に反し、いかにしても抑壓しがたい殘酷を踏み越えて前進する奴隸があるために、社会は不安となり反抗はあいつぎ闘争の巷と化し、人民の武装した革命は發生しなければならぬのである。革命者に對する血の彈壓がつよまり、革命者のみにとゞまらず一般の進歩的青年や学生の血が流されれば流されるほど、權力者に對する闘争は昂まつていつた。そして、暴力による抵抗は、社会運動において民主主義と自由を守り内外の反動勢力から解放された新社会をつくり、死滅してゆく舊社会を破壊するための道具とならねばならなかつた。この舊社会の壓迫をはねのけ舊社会を破壊するために使用される道具である暴力は、たしかに毒素であるには違いない、しかしそれは狂惡な暴力をたおすための毒素であり、人民の上へのしかゝつてゐる害毒を排除するための

毒素であり、人民の敵を消滅することによつて毒物の使用者をも潔めることのできる毒素である、しかも究局において世界から暴力を消滅するための最後の暴力となる。正義のため人民のための暴力は神聖であり力あるものである。それはすべてを改造する、舊いものを新らしく汚れたものを潔めることができる。だから魯迅はいつている。

中國的人民，是常用自己的血，去洗權力者的手，使他又變成潔淨的人物。(註三二)

したがつて暴力は新たな社会をはらんでいる舊社会の助産婦となるのである。

三

魯迅の暴力思想はその他の場合と同じく、彼畢生の念願であつた中國および中國民族の解放と進歩という目的からでている。暴力は迫られた手段であり、しかもとり得る唯一の手段である。現實の具體的調査研究なしに、たゞ抽象的理論から出發して甘美な人類愛を説くことは自由である、そういう人びとの眼には魯迅はあまりに激しくまた偏狭とさえ映るだろう。なおまた彼のヒューマンイズムに疑いをはさむこともできるのだ。しかし魯迅は疑いもなく偉大なヒューマンリストである。魯迅をコミュニストと呼ぶことに異議ある人でもヒューマンリスト魯迅を否定することはできない。いや、こうもいえるのだ、魯迅はヒューマンリストだからこそ暴力論者となり得たのであり、コミュニストでさえありうると。事實、彼の暴力論はその根源をヒューマンイズムにもつてゐる、魯迅のヒューマンイズムは暴力なしには考えられないと同じくその根源をヒューマンイズムにもつてゐるのである。彼が常に考えていたのは中國民族の運命でありその將來であつた。しかも中國の歴史は絶え間なく殘虐な支配階級による人民の血潮に彩られていたのであり、その暴壓にさらされていたのである。中國人民の血と魯迅のヒューマンイズムとは切り離せない、五十數年の生涯にわたつて彼はどれほど中國人民の血潮をみたゞろう。彼が若くして民族革命運動に従事したのも八ヶ國連合軍によ

る中國人民への血の虐殺であつたように、彼が暴力抵抗思想を形成した一九二六年も三・一八や五・卅が契機となつてゐる。だから魯迅はその暴力思想を基本的に完成した時にこう書いてゐるのだ。

這雖然不是我的血所寫，卻是見了我的同輩和我年幼的青年們的血而寫的。（註三三）

魯迅の雜文中でも三・一八直後に書いた幾つかほど彼の異常な憤激と悲痛が青白き炎となつて燃え上つてゐるものはない。その後一九二七年國民黨の裏切は中國革命者の血の河をもつて魯迅に衝激をあたえはしたが、前期の三・一八當時に比すべき悲憤の文字はみられない。一九三一年左翼作家に加えられたテロに反應を示した「中國無産階級革命文學和前驅的血」およびその後彼らを追悼した「爲了忘卻的記念」はそれぞれに異つた色合をもつた悲憤の書であるが、それでも三・一八直後の「無花的薔薇」「死地」「可慘與可笑」「記念劉和珍君」「空談」等とは質的に異つてゐる。表面的には前期の方の憤りが激しく感ぜられるが、實質的には後期の方が深刻である。後期における悲憤は、それが沈涵してゐるだけにそれだけ凄味をおびてゐる。というのは、前期の魯迅が徒手空拳で何ら武裝されてゐず、これからの暴力抗爭を決意してゐるのに對し、後期においてはすでに懷中に匕首をのみながら抑えきれぬ悲憤をかすかに洩らしてゐるからである。それも長期の、頑強な、非妥協の武力抗爭のために力を蓄積してやがては來るその日を待ちながら。魯迅にとつて、殺戮されたものが青年・学生であるときにその悲哀はひじょうに強く、その他の場合にはそれほどでない。このことは彼が晩年に「守常全集題記」に書いてゐるとおりである。

在廈門知道了這消息之後，橢圓的臉，細細的眼睛和鬚子，藍布袍，黑馬褂，就時時出現在我的眼前，其間還隱約看見絞首臺。痛楚是也有些的，但比先前淡漠了。這是我歷來的偏見：見同輩之死，總沒有像見青年之死的悲傷。（註三四）

李大釗は同輩であるばかりでなくコミュニニストである、魯迅が革命家であるコミュニニストに加えられた殺戮に對

する態度と何ら政治にかゝわらない青年や学生への殺戮に對する態度はちがう。コミュニストはすでに充分そのことあるを覺悟の上でコミュニストである、だからその悲憤もある程度控え目になつてゐる、しかし一般の青年・学生に對し殺戮がおこなわれたときに、魯迅の憤激は爆發せずにはいられない。この點については馮雪峯も「回憶魯迅」において、革命者に加えられた流血の魯迅の心情にあたえた變化をこういつてゐる。以前の魯迅は逮捕され殺戮されたものがコミュニストや革命家であるなしかゝわらずその人びとを悼み支配階級に對するかぎりない憎惡を感じた。しかし晩年になると區別するようになり、犠牲者が革命家やコミュニストであつたとき彼の悲痛な感情はおさえられたが、一般の進歩分子や青年の場合彼の不安と憤怒はあからさまに表わされた。

同じく革命家やコミュニストでも左翼作家の若い柔石等の死に對しては、若き有爲の青年である彼らの死への悲憤と共にファシストに對するかぎりない憎惡を見ることが出来る。それらが言論の自由をうばわれている筆をとおして洒沈のうちにはげしく戰鬥的氣魄をこめて凄味をおびてゐるのである。

在一个深夜裏，我站在客棧的院子中，周圍是推着的破爛的什物；人們都睡覺了，連我的女人和孩子。我沈重的感到我失掉了很好的朋友，中國失掉了很好的青年，我在悲憤中沈靜下去了，……（註三五）

要寫下去，在中國的現在，還是沒有寫處的。青年時讀向子期思舊賦，很怪他爲什麼只有寥寥幾行，剛開頭卻又熬了尾。然而，現在我懂得了。

不是年青的爲年老的寫記念，而在這三十年中，卻使我目睹許多青年的血，屢屢淤積起來，將我埋得不能呼吸，我只能用這樣的筆墨，寫幾句文章，筆是從泥土中控一個小孔，自己延口殘喘，這是怎樣的世界呢。夜正長，路也正長，我不如忘卻，不說的好罷。但我知道，即使不是我，將來總會有記起他們，再說他們的時候的。（註三六）

魯迅の悲憤の文字として三・一八を背景とし階級論的飛躍準備の時代の花なきバラと、すでに左聯の領導者となつていた時代のそれとはその思想性からみても質的な差異がある。犠牲者たちの實現すべく努力した新しき社会は、長い暗黒と苦闘のうちにやがては必ず勝利するという預見を含んでいたのである。

魯迅がみたものは、暗黒に光明をもたらすべく自己の利害得失を忘れて献身した、誠實純真優秀な青年・学生の血である。魯迅の生きていた呪うべき舊社会がどんなに暗かつたかについては、いまくどく述べる必要はない。たゞこういう社会ですこしでも明るくしようと呻吟すればたちまち殺戮されたことである。だから普通の眼でこの現實をみることはできないのだ。現實主義者の魯迅はこの現實を多少なりとも民主主義的自由をもつてはいる外國のそれと同様にみ、外國の具體的現實には妥當するがこの異常な中國の社会では妥當しない思想や方法・態度はとらないのである。改革や革命の多くは流血をとまなう、魯迅は血を見てしりごみし美しくはあるが現實の改革には力のない普遍的な人類愛の思想へ逃げこむことはしなかつた。しかし他方では流血が避けがたいとしても、その血をなるべく少くというのがせめてもの思いだつたろう。もつともこのことは、改革に必要な莫大な流血を否定することにはならない。魯迅はこういつているのだ。

改革者自然常不免于流血，但流血非即等于改革。血的應用，正如金錢一般，吝嗇固然是不行的，浪費也大
大的失算。我對於這回的犧牲者，非常覺得哀傷。（註三七）

すなわち、魯迅としては、流血すなわち改革という誤つた觀點から流血を意に介せず或いはむしろ讚美し人命を輕視する偏向をいましているのである。革命や改革に従事するものは、がんらい人間を助けるためであつて殺すためではないはずである、むやみに死にたがつたり、または人を死地に驅りたてるようなものは、革命的ロマンチストやアヂテーターとはいえるが現實主義の革命家には値しない。だから魯迅はこうもいつているではないか。「いまの

中國の小兒病の青年たちは死ぬことをちつとも怖れない、ばかりでなく死にたがつてゐるかのやうだ。だが僕はそれはそれがよくないと云ふ、容易く死にたがつてゐる人間には、ほんとうの運動はできない」。(註三八)

これらからも魯迅が當時の革命家たちよりは遙かに革命家らしいことが判るだろう。彼が一生を通じて革命家とか指導者とかいうレッテルをはられることを拒んだ理由はこゝにもあるのだ。

但革命的先驅者の血、現在已經並不希奇了。單就我自己說罷、七年前爲了幾個人、就發過不少激昂的空論、後來聽慣了電刑、鎗斃、斬決、暗殺的故事、神經漸漸麻木、毫不喫驚、也無言說了。我想、就是報上所記的「人山人海」去看梟首示衆的頭顱的人們、恐怕也未必覺得更興奮于看賽花燈的罷。血是流得太多了。(註三九)

あまりに多く流された血潮は人を不感症におとし入れる、これは怖ろしいことだ。中國民族が過去において流した血は莫大なものである、しかもその大部分は中國を光明あらしめるには役立たず、むしろ沙漠をふやすだけだった。魯迅がよく語つたという有名なことば、「中國の將來には沙漠が見える」も白色テロルの嵐のなかで吐き出されたものである。一九三一年二月七日の深夜、上海の龍華國民黨警備司令部で、柔石等五人の左翼作家と十八人の革命家が鐵鎖で珠子つなぎのまゝ銃殺された後、眞實を知つた魯迅は憤怒と悲哀のあまり聲も出なかつたそうである。それから魯迅は馮雪峯にこう語つたという「このまゝでゆくと、中國は彼ら(國民黨ファシスト)のためにおしまひになる！」中國の將來に對する魯迅の憂慮と慨嘆は、單にファシストへの憤怒として表わされているのではない。また同時に革命者へも洩らされている。この間の事情は馮雪峯の「回憶魯迅」にくわしい、革命と血の犠牲の問題は、魯迅の人道精神を知る上に重大だからさらに立入つてみよう。

馮雪峯が左聯の秘密機關誌「前哨」の原稿である「中國プロレタリア革命文学と先驅者の血」および「柔石小傳」を受取りに魯迅の許へいつた時のことである。魯迅のことばを彼は書いてある。

中國民族過去流的血是實在大的，但大部分血流的結果只是使中國增加了沙漠，很少帶來改革的結果，我們現在是要使血爲了民族的新生而流。

一個民族，人民的血流多了，到人們都不以流血爲意的時候，那是很可怕的；但要減少流血，不能希望于臨末的反動階級；革命者不是避免流血，而是要不怕流血犧牲又要看重自己的血的價值。（註四〇）

血の犠牲は避けられないしまた避くべきでもないとするれば、流血を少くするより外ない。しかしこれまた死滅してゆく反動階級に望みえないとするれば、革命者がその責任を負わねばならぬことになる。魯迅は國民黨のテロに激しい憎悪を感じてはいたが、他方では革命者に對しても憂慮を覺えずにはいられなかつた。柔石らが逮捕されたときの様子を、魯迅は「どうしてこんなに不注意なのか」といつた。彼らは東方飯店で會議していたそうであるが詳しい事情はわからない。しかし、同じく逮捕銃殺された胡也頻の小説にも、道をゆきながら革命の機密を話し合う革命家を描いた個所があるから、まずそうしたものだつたのであろう。したがつて、魯迅はこうつづける、『做法は還得想一的』このことばを馮雪峯が、當時の上海の革命指導部の作風をも含めて指していると述べているのは正しい。といふのは、魯迅は最も透徹したリアリストとして革命に流血の犠牲は避けられず革命者はまた犠牲を怖るべきでないことを知りながら、革命の成功にはそれにもまして重要な要因のあることを知つていたからである。そのことを魯迅はこう語つてゐる。

『的確不錯的，革命要成功，單憑黨員英勇，革命者不怕流血犧牲，還是不夠的；還要有正確的領導！……要改正一向以爲革命就只是犧牲流血的事情，成功不成功在所不計的那種想法。』

『不怕犧牲，勇敢，都是革命成功的要素；但沒有明確的政綱，正確的策略和領導，就要流于所謂「蠻幹」。革命的目的地不變，戰鬥的策略是可以變的，這就需要領導！此外也需要堅持，鞏戰……』（註四一）

一九三一年當時の中共中央は李立三コースにかわつて陳紹禹(王明)が指導していたが、依然として一九二七年以來つゞいていた極左思想と政策のもとにあり、教條主義と宗派主義が支配的であつた。この偏向によつて指導的地位より追放された瞿秋白が文化の面において輝かしい活動ぶりを示し、魯迅に影響をあたえまた魯迅に学んでいたのは示唆的である。

魯迅が自己を犠牲にし勇敢かつねばり強く奮闘したというのも、その推進力の一つになつてゐるものは、被壓迫者に對する愛情と抑壓者に對する憎惡からである。もちろん、これは魯迅の生涯をとおして一貫しているが、前期と後期でその内容が質的に異つてゐることを否定するものではない。後期においてはいうまでもなく階級的立場にたつてゐる、このことは誰でも否認することはできない、魯迅が階級的であるのは、ある程度マルクス・レーニン主義を研究した結果であることは斷言できる、第一にいわれているのは創造社との論戰である。魯迅はこの論争をとおしてマルクス・レーニン主義を自己のものとした。許廣平の「欣慰的記念」によると、一九二七年から三四年にかけて殆ど毎日社会科学方面の著作を読んでいたとある。私はこのことから晩年の魯迅が大いに研究していたことは否めないと思つてゐたが、實際にどの程度まで研究していたかについては詳かでなかつた。前期において李大釗との交友もどれだけ思想的影響を與えられていたかもはつきりしない。ところが最近「魯迅日記」の最後にある書帳をみる事ができた。私はこれに載つてゐない書物もあるだろうと思つて、内山完造氏に御教示をこうたが、これ以外にはないとのことであつた。これらのうちマルクス・レーニン主義關係のものを次にかゞける。

革命藝術大系

(一・〇〇)

十月十日

革命露西亞の藝術

(二・〇〇)

無産階級の文化

(二・二〇)

十二月十四日

トルストイとマルクス

(〇・八〇)

ロシア革命後の文学

(〇・八〇)

一九二八年

レーニンのゴリキへの手紙

(〇・八〇)

階級意識とは何ぞや

(〇・五〇)

空想から科学へ

(一・六〇)

二月五日

史的唯物論

(一・〇〇)

拷問と虐殺

(〇・六〇)

ロシア労働黨史

(〇・九〇)

二月十日

支那革命の諸問題

(〇・四五)

二月十三日

唯物論と辯證法の根本概念

(〇・四五)

辯證法と其方法

(〇・四五)

新反對派ニ就イテ

(〇・六〇)

辯證法雜書

(三・五〇)

二月十九日

唯物史觀解説	(二・二〇)	三月二十一日
文学と革命	(二・二〇)	二月二十三日
露國の文藝政策	(一・〇〇)	二月二十七日
マルキシズムの謬論	(〇・五〇)	二月二十九日
ロシアの牢獄	(一・〇〇)	三月二日
階級闘争理論	(〇・七〇)	三月十四日
唯物的歴史理論	(一・二〇)	
經濟概念	(〇・七〇)	三月二十日
民族社会國家觀	(〇・七〇)	
社会思想史大要	(二・八〇)	
史的唯物論略解	(一・一〇)	
革命及世界の明日	(〇・三〇)	三月二十五日
辯證的唯物論入門	(二・二〇)	
階級闘争小史	(〇・三五)	
マルクスの辯證法	(〇・六五)	
佐野学雜藁	(二・二〇)	四月四日
ファシズムに對する闘争	(〇・五〇)	
マルクス主義と倫理	(〇・七〇)	四月十四日

マルクス主義的作家論	(〇・六〇)	五月一日
プロレタリア文学論	(一・六〇)	
支那は眼覚め行く	(一・二〇)	
歴史過程の展望	(〇・四〇)	
輿論と羣衆	(一・五〇)	
レーニンの辯證法	(〇・七〇)	六月二十六日
一革命家の人生社会觀	(一・六〇)	
階級社会の諸問題		七月二日
マルクス主義と藝術運動	(一・六〇)	
マルクス主義の根本問題	(〇・六〇)	八月一日
マルクス藝術論	(一・三〇)	九月三日
藝術と唯物史觀	(三・三〇)	十月十日
階級社会の藝術	(一・一〇)	
思想家としてのマルクス	(二・〇〇)	
社会主義及び社会運動	(一・一〇)	十月十六日
史的唯物論 上	(〇・八〇)	
社会進化の鐵則	(〇・六〇)	
藝術の唯物史觀的解釋	(一・〇〇)	

- マルキシストの見るトルストイ(〇・七〇) 十二月十二日
世界文学と無産階級 (一・〇〇) 十二月二十日
唯物史観入門 (一・二〇) 十二月二十七日
支那革命の現段階 (〇・二五〇) 十二月三十一日

—一九二九年—

- 史的一元論 (二・二〇)
唯物史観研究 (三・三〇)
ソヴェト政治組織 (七・九〇) 四月十八日
史的唯物論及例證 (一・四〇) 五月二日
ブレハーノフ論 (一・五〇)
ブレハーノフ選集 (三・五〇) 六月二十四日
自由と必然 (〇・九〇)
唯物史観 (〇・九〇) 七月六日
革命藝術大系 (一・一〇) 七月九日
マルクス主義批評論 (一・八〇) 七月二十五日
プロレタリア藝術教程 (一・二〇)
社会科学の豫備概念 (二・四〇) 九月十一日

史的唯物論ヨリ見たル文学 (一・七〇)

辯證法 (一・五〇) 十月七日

若きソウエト・ロシア (二・〇〇) 十月十七日

レーニンの幼少時代 (〇・七〇) 十月十九日

世界觀としてのマルキシズム (〇・五〇)

ロシア社会史 (三・四〇) 十一月十九日

史的唯物論 (一・四〇) 十一月二十七日

藝術と無産階級 (一・六〇)

マルクス主義批判者の批判 (二・〇〇) 十一月三十日

近代唯物論史 (二・〇〇)

文学理論の諸問題 (二・四〇)

— 一九三〇年 —

新興藝術四本 (四・〇〇) 一月六日

Russia Today and Yesterday (一・一・〇〇) 一月二十五日

レーニンと哲学 (一・八〇)

レーニン主義と哲学 (一・五〇)

轉形期の歴史学 (二・四〇) 二月四日

文学的戦術論	(一・三〇〇)	
辯證法と自然科学	(二・三〇〇)	三月十一日
藝術とマルクス主義	(一・七〇〇)	四月七日
唯物史観序説	(二・七〇〇)	
プロ藝術教程(3)	(一・七〇〇)	五月十四日
ロシア革命映畫	(二・八〇〇)	五月十九日
新興藝術(七・八)	(一・二〇〇)	五月二十五日
ソ・ロ文学の展望	(二・〇〇〇)	
プロ美術の爲めに	(二・六〇〇)	
マルクス主義と法理学	(一・八〇〇)	六月三日
自然科学と辯證法(下)	(四・〇〇〇)	七月二日
ソヴェートロシア文学理論	(三・二〇〇)	八月十四日
プロレタリア藝術教程(4)	(二・〇〇〇)	八月二十二日
史的唯物論入門	(二・六〇〇)	九月四日
戦闘的唯物論	(二・〇〇〇)	九月十二日
機械論と唯物論	(二・〇〇〇)	十月八日
藝術社会学の方法論	(一・二〇〇)	十月二十二日
文学革命の前哨	(二・四〇〇)	十月二十五日

機械と藝術革命

(三・〇〇)

レーニンと藝術

(一・五〇)

十二月三日

ドイツ語は次のようなものである。

30 neue Erzählen des neuen Russland 六・五

Der russische Revolutionsfilm 一・八〇

Das neue Gesicht der herrschenden Klasse 四・六〇

Erinnerungen an Lenin 一・三〇

Kulturgeschichte des Prolet. (Vol. I) 一七・〇〇

一九二七年から一九三〇年までのものはほとんど右のようなものである。一九三一年から三六年までも大體において右と同じようなものであるから、これ以上拔萃することはやめる。たゞ一九三三年には資本論の文学的構造 (〇・七〇) 十二月十日、文学のための經濟学(二・六〇) 十一月二十七日がある。魯迅の藏書は日英獨佛露語の各國語にわたつてゐるが、彼のマルクス主義研究は右の書物をみてもわかるように極めて脆弱なものである。少くとも藏書からみれば魯迅が社会科学を深く研究していたという説は受入れることができない。ひじようにドイツ語ができるにもかゝらず魯迅は原典でマルクス主義を読んでいない。彼が読んでゐるのはほとんど日譯本によつてゐる。それも、文学論・藝術論・マルクス主義哲学の入門書みたいなものである。魯迅の書簡にあるように彼は資本論を手にとつたこともないのだ。資本論は一度も手にしたことがないというのを、私は何の誇張もなしにうけとれる。ところで、マルクス・レーニン主義を研究しようとするほどならば、少くとも手にとつてみるぐらいの氣持にはなるだろうと思われる。にもかゝらず、資本論を手にとろうとさえしなかつたのはどういふことか。この問題には魯迅の學問や思

想に對する態度が大いに關係してゐるだろう。彼はたしかに學者でもあり思想家でもあつた。國文學者として彼は當代隨一であつたし、思想家としても傑出してゐたが、彼はその思想を學說として體系化するような意味での思想家ではなかつた。彼の學問も思想も文學も、彼のあり得るすべてのものはたゞ一つ中國および中國民族の將來ということにかけられていたのであり、中國および中國民族の將來のために思索し學問し文學しまた理論の研究にも従事したのである。このことは魯迅を理解するにあつて重大なことである。彼はいわゆる思想家と呼ばれる人びととは範疇を異にする、彼はむしろ實踐家であり戦士であり革命家ともいえるかも知れない。したがつて、馮雪峯が次のようにいつてゐるのは正當である。

他在主觀上確實不是爲了要在思想上有所建樹和爲了要解決思想上的什麼問題那樣地去進行思考運動或從事理論研究，而是現實鬭爭的要求和意志使他去思想，去探求真理，去研究和解決思想問題的。（註四二）

外國におけるいかに偉大な理論や學說も直接に魯迅の心をひきはしなかつた。彼にとつて重大なことは、理論や學說ではなく現實である、しかも外國の現實ではなく中國の現實であり、國民黨支配下の暗黒中國の現實である。

即如我自己，何嘗懂什麼經濟學或看了什麼宣傳文字，資本論不但未嘗寓目，連手碰也沒有過。然而啓示我的事實，而且並非外國的事實，倒是中國的事實，中國的非「匪區」的事實，這有什麼法子呢？（註四三）

魯迅は經濟學がわからないといつてゐる、そして實際わからなかつたであろう、事實彼は資本論を読もうともしなかつたのだから。この點からも魯迅がマルクス・レーニン主義を深く研究してゐたとはいえない。だから彼がしよつちゆう政治はわからないといつてゐたのもほんとうである。だがまたこうもいつてゐる、「一兵卒にはなれる、筆をもつて」。文化思想の戦線で戦つたが資本論を勉強してゐない魯迅が、中國の具體的歴史的現實と結びついた創造的マルクス主義の創始者になるはずはなかつた。しかし彼の徹底したリアリズムは常に中國の現實と結びついていた、

中國の現實の發展と、もに彼も發展していつた。魯迅のリアリズムの源泉は中國革命の現實であり、彼のすべてを決定する社会的基礎であつた。したがつて、魯迅は、毛澤東が具體的中國と統一されたマルクス・レーニン主義への發展をなしとげたと同じことを文學の分野でなしとげることができたのである。また最も非政治的であつた魯迅が最も政治性を示すこともできたのである。ところで、魯迅のマルクス主義研究は歴史唯物論・唯物辯證法・マルクス主義藝術論等にすぎない、が魯迅にとつて大切なのは實際の工作であつて抽象的理論ではない。彼は現實の戰鬥のうちに幾多の經驗と教訓を学び、これらの經驗を理論の水準に高めている、彼が思想家とよばれるのは歴史的なものと理論的なものを統一しているからだ。マルクス主義者にとつて重要なことは、現實の革命工作の經驗を理論にたかめると、同時に、他方ではマルクス・レーニン主義の學說を學ぶということがもう一つ重要なことだろう。すなわち、マルクス・レーニン主義の理論を學ぶと共に、問題を觀察し處理する方法と態度を學び、その工作作風と方法を學び、理論と實踐を統一せしめることが必要なはずである。ところが、魯迅は工作の必要に迫られてマルクス・レーニン主義を學んでゐる、そして彼の工作というのはマルクス・レーニン主義の理論を高め發展させることにあるのでもなければ、コミニunistとして政治活動に従うことでもなく、文化工作にあつたのである。だから彼はマルクス・レーニン主義の理論をさらに深く研究し資本論を読もうとはしなかつたのであろう。それからまた、彼の周圍に集つていた青年の間にはかなり多くのコミニunistがいたが、彼らの多くは文學者であり、彼は殆どそういう影響はうけていなかったのではないかということである。柔石や馮雪峯はおそらくその點で影響はあたえていないだろう。瞿秋白についてはこの方面をあきらかにする資料がいまのところないので何ともいえない。

魯迅が階級論へ移つた契機としては蔣介石の裏切りクーデターが直接的なものであり、ヒューマニストとしての彼が、コミニunistに對する暴力の壓迫と殺戮への憎しみが考えられるが、これはたんに一つの契機にすぎない。一

九二五・六年代においてすでに確立していた社会革命への鞏固な意志と革命の敵および革命勢力への認識、それに基づいた戦略戦術が基本的にマルクス・レーニン主義に一致していたという諸條件を考えねばならない。これを中國革命の現實からみれば、一九二五・六年は成立以來わずか數年の幼兒である中國共產黨が驚異的に成長し、香港海員ストや五・卅を指導して大きくその姿をあらわした時代である。かつて戊戌政變が中國における改良主義の破産を完全に證明したのと同じく、一九二七年は國民黨指導のものふるいブルジョア民主主義革命の破産を、そして新しい新民主主義革命の將來性を豫示していたからである。すなわち、中國社会においては帝國主義や封建主義との妥協のもとにはいかなる革命も失敗するということである。しかも中國の無産階級は世界において最も壓迫をうけ最も擄取をうけている階級であるが故に、社会革命への要求は最も熾烈であること、また革命實踐における積極性と頑強性に富んでおり、眞に中國革命を荷いうる階級であるという認識に到達したことである。この客觀的事實の認識と教訓こそ魯迅をして階級的立場へと移向せしめた主要理由である。事實において、彼は中國社会の革命的發展を正確に反映したのである。唯物論者としての魯迅は思想的にその基礎構造である現實社会の變化を反映しそれと共に變化している。だが魯迅思想はたんに現實の中國社会を反映しているだけにとどまるのであろうか。單に反映しているだけならば、それは消極的であり否定的であり中立的である。ところが魯迅は中國の運命や社会の暗黒に對して無關心でありえず、積極的にそれらの悪傾向に反撃を加え、新しいものゝ形成を援助し鞏固にし、古きものゝ消滅と新しきものゝ成生に全力をふるつたのである。したがつて、私は魯迅のヒューマニズを一貫するものは抑壓者に對する憎惡と被抑壓者への愛情であると信じているが、後期においてはあきらかにマルクス・レーニン主義に裏づけられたヒューマニズムということを力説しなければならぬのである。

しかし、同時に、私は魯迅が否定的な方向でマルクス主義に近づいたという竹内好氏のことばを重視せずにはい

られない。「憎むものに憎まれること、そのように自己を組織すること、それが彼の生活原理である。自分の憎むものから自分が憎まれていると知るとは、彼に生きる喜びをあたえる。彼の憎むものに彼の生きてゐるのが目ざわりになるから、彼は生き甲斐を感じるのだ。もしも、一九二七年の事件（暴力による共産主義壓迫）がなければ、彼とマルクス主義との出会いは、形が變つていたかもしれない。ヒュウマニストとして生きるためにマルクス主義を選ばなければならぬ必然さがあつたわけだ。つまり彼は、いつの場合でもそうだが、否定的な方向でマルクス主義に近づいた。……彼のマルクス主義との出会いは、反封建・反官僚・反帝國主義の線のうへでの出会いであつた。（註四四）

たしかに、魯迅は否定的な方向でマルクス主義に近づいたのである。彼は四・一二がなかつたとしてもマルクス主義に近づいていつたじろ。また蔣介石の裏切りは一九二七年四月十二日におきなくてもその前後に起きていたじろ、なぜなら必然性は偶然性をとおして貫徹されるからである。そして外國帝國主義と妥協しその奴才となつた國民黨がファシズム化するのには必然的だからだ。竹内好氏の否定的な方向でということばは、今日の魯迅研究では大切なことだと思ふ。現在、中國の魯迅研究はすばらしい、とくに馮雪峯のはすぐれているが、中國の魯迅研究家は馮雪峯をふくめてこの點を見落しているようである。一九二七年の魯迅の發展はまぎれもなく、否定的方向での發展である。もつとも、近づいたときとその後とは質的に異つてゐるから、この違ひを抹殺することはできない、晩年の魯迅は積極的に毛澤東思想へと面を向けている。少くとも主觀的意圖は肯定的な面でより深くつき進んでゐたようである。すなわち彼はマルクス・レーニン主義の中國における勝利を確信してゐたのであり、共産黨員への同情やファシストに對する憎しみという否定的側面のみとゞまつてゐたのではない。それにもかゝらず、晩年の魯迅がその心情において、主觀的意圖の如何にかゝらず否定的側面を多分にもつてゐたことは争われない。その原因は彼がマルクス・レーニン主義者であるより以上にヒュウマニストであつたからだ、つまり魯迅のヒュウマニズムはマルクス・

レーニン主義を超えている。これを馮雪峯流に言えば、魯迅が一九二七年以來戦つてきた自己闘争である小資産階級的思想感情を完全にマルクス主義化していなかつたともいえよう。一九二八年に魯迅はこう書いています。

我正有些神經過敏，于是覺得正像是「聚而殲旃」，很不免哀痛。雖然明知這是「淺薄的人道主義」不時髦已經兩三年了，但因爲小資産階級根性未除，于心總是戚戚。那時我就想到我恐怕也是安排筵宴的一個人……」（註四五）

ここに魯迅の矛盾がある、それは小資産階級的人道主義とプロレタリアの階級的人道主義としてあらわされる。魯迅晩年の十年間は實にこの矛盾の闘争の十年間だつた。

但立意怎樣，於事實是無干的。我疑心喫苦的人們中，或不免有看了我的文章，受了刺戟，於是挺身出而革命的青年，所以實在很苦痛。但這也因爲我天生的不是革命家的緣故，倘是革命鉅子，看這一點犧牲，是不算一回事的。（註四六）

蒋介石の裏切によつて幾多の青年の血が流されているとき、それらの青年たちのうちに自分の文章を読んで刺戟をうけ革命運動に従事した人びとのあつたであろうという思いが、魯迅の胸を締めつけずにはおかないのだ。そしてこう自己批判している、自分は生れながらの革命家ではないと。なぜなら革命の巨頭はこれしきの犠牲など意にも介しないからだ、革命家とはそういうものである、とくに共產主義者とはそういうものである。人民の血の犠牲をおそれているものは共產主義者ではない、また血の犠牲に心を傷めているものも共產主義者ではない。魯迅はそのことをよく知つていた。したがつて、當時の共產主義者は魯迅に「感傷的な人道主義者」とか淺薄な人道主義者」という悪意あることばを投げつけた。思想は別として情情的にみれば、魯迅は共產主義者であることを拒否しようとする傾向をもつている。そういう魯迅が最も共產主義的でもあつたことを彼らはしなかつた。魯迅の愛憎はつよい、それ故彼は自己の愛する人民を抑壓し虐げ暴力をふるつてゐるファシストを心から憎むことができた。魯迅の味方への愛と敵へ

の憎しみ、その徹底性はもちろんコミunistと共通するものをもっている。だから雪峯は、魯迅は黨員ではなかつたが黨性がひじように強いといつている、魯迅の原則性として人民の利益革命の利益を問題となし、愛憎・敵味方に對する原則性を強調しているのである。これはそのとおりだろう、しかしそれでも私にはなかなか納得がゆかない。さらに別な例をあげよう、それは「我要騙人」である、一九三六年二月に書いているのだから死ぬ八ヶ月前のものである。魯迅が映畫にゆくとき水害罹災者への募金をしている十二三歳の女の子につかまつた、彼女は寒さで鼻の頭まで赤くしている、小錢がないというといひじように失望する、彼は氣の毒に思い映畫の入場券を買つてやつたうえ一圓をあたえると彼女はひじように喜ぶ。これで魯迅は満足するのだ、魯迅にしてみれば、募金が罹災者の手には渡らず役人の飲み喰いに使い果されることを万々承知なのだ。それだけではない、罹災者は安全なところへ逃げて來たが治安に害ありとして銃殺されてしまつていなのだ。魯迅はそれらすべてを知りすぎるほど知つていながら天真瀾漫な少女のよるこびを一圓で買うのである。魯迅はいつている、「私は人の失望するのをみたくない」と。また次のようにつゞける、「私の八十歳の母が、天國はほんとうにあるかと尋ねたら、躊躇なくあると答えるだろう」と。再びくりかえすが、これは一九三六年の二月に書いていなのだ、魯迅がマルクス・レーニン主義を自己のものとなし、さらに深く積極的に近づいてゆこうとしていたとされている時代なのである。コミunistは主觀的意圖の如何をとわず客觀的に問題をみる、コミunistは階級の敵を利用するいかなる行爲も峻拒するだろう、彼らは階級の敵に煙草を献上しないはずである、たつた一圓にしても。また八十歳の老母が泣き悲しむのを冷やかに、少くとも表面は冷やかに見やる鐵石の心をもたねばならないだろう。魯迅にそれができるだろうか？私はこの點から魯迅をコミunistと呼ぶには些か躊躇せずにはいられない、私が魯迅をコミunistよりもコミunist的であるという一つの理由もこゝにある。しかしこのことはもちろん彼が基本的にコミunist的であることを覆えすものではない、前にもいつたよう

に、魯迅晩年の十年はこの肯定的面と否定的面との闘争の十年であつた。しかしこの内的矛盾が解決されないうちに魯迅は死んでしまつた。彼の内的矛盾が生前に解決されなかつたということは、彼の生前において中國社会の根本的矛盾が解決されなかつたことにも關連している。彼が欲すれば、當時國民黨によつて匪區とよばれていた地方へゆけたかもしれない、そこでは彼の矛盾を解決してくれたかもしれない。しかし魯迅はそれを欲しなかつた、彼は匪區へゆこうともしなければまた外國へ亡命しようとしなかつた。彼の戦いの場は、中國における階級闘争の中心地であり、外國帝國主義の對華侵略の據點である上海にあつた。彼は自己の任務を誰よりもよく知つていた、國內反動勢力と國際帝國主義の陣地上海において、彼らと頑強に非妥協の戦闘をつゞけることこそ彼の任務であつた。誰がすゝめても彼が一步も上海をはなれようとしなかつたのはそのためである。彼は一生を通じて一個の矛盾である、彼が矛盾であることはすなわち中國が矛盾だということである。しかし彼はそれが永久に解決されない矛盾とは信じていなかつた。いまや魯迅が悲しんだ呪うべき社会は永遠に過ぎ去つた。そして魯迅が半世紀以上にわたつて苦闘し探索しつゞけたものは毛澤東思想へと發展せしめられている。毛澤東は魯迅から深刻な影響をうけた、眞の共產主義者である毛澤東が魯迅精神に学び彼の領導する中共のモラルを高めていることは事實である。毛澤東が激賞した魯迅精神は馮雪峯のいうように毛澤東思想のなかに概括され統一されている。それで最後にこの點にふれておきたい。雪峯は「回憶魯迅」で魯迅が黨の組織に入らなかつた理由を述べている、私はそれを的はずれだとはいわないが、満足はできない。雪峯はこういつている。

當時我們和魯迅先生自己，都不曾考慮過他入黨的問題，是有下面這兩個實際原因的：一、加入黨，就要過黨的組織生活；這在當時的白色恐怖之下，對於魯迅先生是太不方便的。二、當時國民黨反動派逮捕或屠殺非共產黨員的革命分子或進步分子，比逮捕或屠殺共產黨員，要多一層顧慮；這樣，像魯迅先生這樣的人，國民黨是恨之入骨

的、幾次要殺害他的、他當時不入黨、也就可以少給國民黨一個藉口。(註四七)

馮雪峯が客觀情勢にのみその理由を求めたいのは共產主義者としては當然であろうが、それが根本的な理由とはどうしてもうけとりにくい。魯迅は主觀的客觀的理由から黨の組織に入らなかつたのである。彼が黨の組織に入らなかつたということは、いろいろな意味で重大である。彼の思想・實踐・工作作風は多くの共產主義者よりも共產主義的であつたが、共產主義的でないたゞ一つの點があつたということは何を意味するか。魯迅の落後性あるいは優越性を示すものでしかないだろう。すなわち、魯迅自身がいつているように、小資産階級の根性が残つているのか、または共產主義を超えているかどちらかではないか。魯迅は初期の小資産階級の個人主義ヒュウマニズムからプロレタリアの社会主義ヒュウマニズムへと發展した。現實の中國社会において魯迅が戦い得たものはプロレタリアの社会主義ヒュウマニズムであり、それ以外の何物でもあることはできなかつた。魯迅にとつてこれは眞理であつた。プロレタリア社会主義ヒュウマニズムなしに魯迅はない。したがつて、魯迅は小資産階級の根性ということを屢々口にしないわけにはゆかなかつたのだ。だが他方では、そういう魯迅も共產主義そのものかまたは共產主義者の作風にある満たされぬものをもちつゞけてきたように思われる、私はこれを馮雪峯との会話のうちに感ずる。そして毛澤東思想の優越性がいよいよ明らかになりつゝあつた一九三六年において、魯迅の毛澤東への傾倒からなおさらそう思わずにはいられない。毛澤東思想はマルクス・レーニン主義の中國革命の實踐との統一という點ばかりではなくその人道精神においても、従來の共產主義者をはるかに超えているのである。この點からみると、魯迅の落後性ともみられるものこそ、實に毛澤東思想と一致するものであり、彼の優越性を示しているのである。すなわち彼のヒュウマニズムは當時のマルクス・レーニン主義を超えていたのであり、中國の共產主義者により高いモラルをあたえているのである。

(本稿は十月二十七日札幌に内山完造氏をむかえて行われた魯迅祭での講演「魯迅の人民愛」に加筆したものである)。

一九五三年十一月三十日

- 註一 魯迅全集第六卷五四頁 且介亭雜文·難行和不信
- 註二 同五五頁
- 註三 全集第六卷二〇頁 且介亭雜文·關於中國的二三事
- 註四 全集第六卷一一〇頁 且介亭雜文·門外文談
- 註五 全集第六卷二八六頁 且介亭雜文二集·田軍作『八月的鄉村』序
- 註六 全集第六卷四〇三頁 且介亭雜文·蕭紅作『生死場』序
- 註七 全集第六卷四三一頁 且介亭雜文二集『題未定』革
- 註八 同四三二頁
- 註九 全集第六卷一一一頁 且介亭雜文·門外文談
- 註一〇 全集第四卷二二八頁 二心集·習慣與改革
- 註一一 同二二九頁
- 註一二 全集第一卷三二三頁 吶喊·一件小事
- 註一三 全集第五卷一三四頁 南腔北調集·經驗
- 註一四 全集第五卷一四二頁 南腔北調集·沙
- 註一五 全集第六卷八五頁 且介亭雜文·從孩子的照相說起
- 註一六 全集第六卷二八七頁 且介亭雜文二集·田軍作『八月的鄉村』序
- 註一七 全集第五卷一四二頁 南腔北調集·沙
- 註一八 全集第六卷五六頁 且介亭雜文·難行和不信
- 註一九 全集第六卷一三二頁 且介亭雜文·運命
- 註二〇 增田涉著魯迅の印象二九頁
- 註二一 同
- 註二二 全集第一卷五九頁 墳·摩羅詩力說

- 註二三 全集第一卷一五一頁 墳・娜拉走後怎樣
- 註二四 全集第一卷二〇七頁・墳・雜憶
- 註二五 全集第一卷二五八頁・墳・論『費厄潑賴』應該緩行
- 註二六 全集第三卷二四九頁・華蓋集續編・無花的薔薇之二
- 註二七 全集第五卷一〇二頁・南腔北調集・由中國女人的脚……
- 註二八 全集第五卷二四九頁 准風月談・抄靶子
- 註二九 全集第五卷一八一頁 南腔北調集・偶成
- 註三〇 同一八二頁
- 註三一 同
- 註三二 全集第六卷四八八頁 且介亭雜文末編・我要騙人
- 註三三 全集第一卷二六一頁 墳・寫在「墳」後面
- 註三四 全集第五卷一一八頁 南腔北調集・『守常全集』題記
- 註三五 全集第五卷八二頁 八五頁 南腔北調集・爲了忘卻的記念
- 註三六 同八四頁八五頁
- 註三七 全集第三卷二六五頁 華蓋集續編・空談
- 註三八 增田涉著魯迅的印象六六頁
- 註三九 全集第五卷一一九頁 南腔北調集・『守常全集』題記
- 註四〇 馮雪峯著回憶魯迅一〇五頁
- 註四一 同一七三頁
- 註四二 同三九頁
- 註四三 魯迅書簡上冊四一六頁
- 註四四 竹內好著魯迅入門八四頁
- 註四五 全集第四卷一〇七頁 三間集・通信

人文研究 第七輯

註四六 同一〇八頁

註四七 回憶魯迅一八〇頁